

令和 6 年 6 月 15 日現在

機関番号：13904

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K19990

研究課題名（和文）「生き方としての俳諧」史構築のための基礎研究 - 惟然作品の網羅的収集と分析 -

研究課題名（英文）Basic research for the construction of a history of "Haikai as a way of life" - Comprehensive collection and analysis of Izen's works

研究代表者

金子 はな (Kaneko, Hana)

豊橋技術科学大学・総合教育院・助教

研究者番号：80964618

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「芭蕉の俳風」中心の俳諧史を是正し、人が生きることを支える「生き方としての俳諧」史を構築するための基礎研究である。本研究の具体的な成果は、現在入手できる惟然の発句及び連句を全て収集・データベース化し、インターネット上に公開したこと、海外の俳諧・俳句研究の特徴とその作品分析における意義を明らかにしたこと、惟然と芭蕉が「乞食」「貧楽」「軽み」「無分別」などと表現した「生き方の理想」に着目した作品研究の重要性を明らかにしたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果の学術的・社会的意義は、惟然の作品を誰でもアクセスできる形で公開したこと、惟然の作品が彼の生き方の思想（「軽み」「無分別」「乞食」「貧楽」）を多分に反映したものであり、その点に芭蕉から近現代俳句までを繋ぐ文学史的意義、人間が生きる上での俳諧の本質的意義が存することを示したことにある。すなわち本研究の成果は、従来の「俳風」至上主義の俳諧史を「生き方としての俳諧」という視点から再構築する基礎となるものであり、俳諧作品の本質的価値、現代的意義の解明に対しても重要な意義を有するものである。

研究成果の概要（英文）： This research is a basic study to correct the Haikai history centered on "Basho's Haiku style" and to construct a history of "Haikai as a way of life" that supports human life. The concrete results of this research include: collecting and compiling a database of all of Izen's Hokku and Renku that are currently available, and making it available on the internet; clarifying the characteristics of overseas Haikai and Haiku studies and their significance in the analysis of Haikai and Haiku works; and clarifying the importance of the study of works focusing on the 'Way of Life' expressed by Izen and Basho as 'Kostujiki (mendicant spirit)', 'Hinraku (enjoy poverty)', 'Karumi (light heart)' and 'Muhunbestu (unfettered mind)'.

研究分野：日本文学

キーワード：俳諧 芭蕉 蕉門 惟然 生き方 俳句の国際化

1. 研究開始当初の背景

(1) これまでの俳諧研究の問題点

従来の俳諧研究は、芭蕉の俳風(蕉風)を最高到達点とし、蕪村や一茶などごく一部の例外を除いて、それを基準に作品を評価してきた。それは芭蕉の直弟子においても同様で、高弟其角でさえ「芭蕉から離反した」と言われ、晩年の弟子である支考や惟然に至っては「邪道に走った」と非難されてきた。ところがその一方で、芭蕉が彼らを終生大切にし、信頼していたことも認められている。従来の俳諧史はこの矛盾を解くことができていない。それは、彼らがなぜ、どのような点で信頼しあっていたかに全く関心を払わなかったからである。

俳風にこだわったこと以外にもこの矛盾を抱えた原因がある。それは近代の研究者が、「当時の俳人の言葉」を鵜呑みにしたことである。惟然について言えば、同門の去来と許六が惟然の発句を批判している。これは同門ゆえのライバル心などいくつかのバイアスがかかっている批判であるにもかかわらず、鈴木重雅(『俳人惟然の研究』1933)や頼原退蔵(『蕉門の人々』1946)といった研究者が無批判に継承し、その後の研究者もきちんと検証することなく追認してしまったのである。

従来の俳諧研究が構築した俳諧史は、俳風にこだわりすぎたため、多くの矛盾を抱えた無理のある俳諧史となっている。何より、芭蕉や直弟子、その他の多くの俳人たちが一体何を大切にし、何を目指していたのか、近世の俳人たちにとって俳諧とは何だったのか、という点を全く描くことができていない。そのような俳諧研究が、自らの現代的意義を明確に示せないのも当然である。

(2) 報告者のこれまでの研究と問題意識

上記のような俳諧史の矛盾を解くため、報告者はこれまで、芭蕉の教え(俳論・俳話等)と直弟子たちの俳論、特に芭蕉が最も高く評価していた惟然と支考を中心に、彼らが何を共有していたのかを研究してきた。その結果、奥の細道の旅を終えた芭蕉は、それまで以上に禅や老荘思想に傾倒し、俳諧を単なる文芸作品ではなく、人が生きることを支える力(生き方)として追究していたこと、惟然や支考がそれを深く理解していたことを明らかにした。

では「生き方としての俳諧」という俳諧の本質を芭蕉と共有していた弟子たちは、なぜ芭蕉とは異なった俳風の作品を生み出したのか。彼らの作品はその本質とどのような関係があるのか。それが明らかになれば、彼らにとっての俳諧とは何かという問題と、それに基づいた作品の評価が可能になり、「芭蕉の俳風」中心主義の歪んだ俳諧史もまた是正できるはずである。

そこで申請者は、次の段階の研究として、惟然と支考の作品の分析を行うこととした。そのためにはまず惟然の作品を網羅的に収集し、整理する必要がある。惟然の作品の全体像は現代においても不明なままだからである。

2. 研究の目的

本研究は、「芭蕉の俳風」中心の俳諧史を是正し、人が生きることを支える「生き方としての俳諧」史を構築するための基礎研究である。具体的には、惟然の発句・連句作品を網羅的に収集・整理し、分析評価することを目的とする。

3. 研究の方法

既に知られている作品に加え、公共機関・個人蔵書等の俳書、伝書等の網羅的資料調査によって可能な限り全ての惟然発句、連句作品を収集する。さらに、出典・使用号等の項目を付したデータベースを作成し、その分析を行う。

4. 研究成果

(1) 作品の網羅的収集

近世の版本または写本を参照し、現在入手できる惟然の発句及び連句を全て収集した(ただし、原本の写真を文献複写等で取得できる場合はその方法によった)。その過程で行った天理大学天理図書館・国立国会図書館・国文学研究資料館における文献調査では、従来の全集類には収録されていない発句11句を発見した。このうちの1句について、通釈および成立事情・季等の解説を加え、論考として発表した。他の9句についても、順次解説を加え公表する予定である。

(2) 作品の整理と公開

作品収集の成果をデータベース化し、成果公開用に作成したホームページにおいて、誰もが利用できる形で公開した。

(3) 惟然作品の分析による評価

作品の収集と並行して分析評価の視点についても研究を進め、進展があった。広く海外の俳諧・俳句研究にも目を向け、調査を進めた結果、ドイツの日本文学研究者 Ekkehard May が示した惟然発句注釈の視点が、本研究に大いに裨益するものであることがわかったため、その特徴と

意義を指摘した論考を発表した。

さらに惟然と芭蕉が共有した俳諧と生き方の理念である「軽み」をテーマとするシンポジウムに登壇し、長年俳諧の思想的側面を探究してきた他のパネリストや、会場の俳諧研究者・俳人らと意見交換を行った。その過程で、「軽み」は支考のいう「虚実自在」(固定観念から解放された精神状態・行動)や人生に対する寛容の心、つまりは生きる姿勢であり、それは近現代俳句にまで適応しうる思想であることが示された。

加えて、惟然が重視した「無分別」も、この「軽み」と同様に、単なる表現の無技巧ではなく作者の内面(心)の状態を指したものであることを明らかにし、近代以来通説の如く扱われてきた惟然「邪路」説は改められる必要があることを指摘した。さらに、惟然が芭蕉と共有し、芭蕉から継承した「乞食」「貧楽」という「軽み」と通じ合う生き方であり、彼の作品世界の形成に深く関わるものであることを著書(共編著、近日刊行予定)において論じた。

以上の成果により、本研究は、惟然の作品は彼の生き方の思想(「軽み」「無分別」「乞食」「貧楽」)を多分に反映したものであり、その点に芭蕉から近現代俳句までを繋ぐ文学史的意義、人間が生きる上での俳諧の本質的意義が存することを示した。すなわち本研究は、従来の「俳風」至上主義の俳諧史を「生き方としての俳諧」という視点から再構築する基礎となるものであり、俳諧作品の本質的価値、現代的意義の解明に対しても重要な意義を有するものである。

その点をさらに明確にすべく、本研究の成果をふまえた上で、惟然作品をより詳しく分析・解説・評価する研究課題「惟然発句の全注釈と現代的意義の解明 「生き方としての俳諧史」構築のための基礎研究」(若手研究、課題番号 23K12080)を 2023 年度から開始した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 金子はな	4. 巻 23
2. 論文標題 俳諧研究における「生き方」という視点の可能性	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本文学文化	6. 最初と最後の頁 66-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金子はな	4. 巻 57
2. 論文標題 惟然の「無分別」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 俳文学報	6. 最初と最後の頁 11-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金子はな	4. 巻 79
2. 論文標題 惟然「南風口の」句考	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 俳文学研究	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金子はな	4. 巻 45
2. 論文標題 Ekkehard Mayの惟然発句注釈 ドイツにおける俳諧（俳句）受容	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 雲雀野	6. 最初と最後の頁 52-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中森康之・谷地快一・金子はな
2. 発表標題 シンポジウム「かるみ」の新展開
3. 学会等名 俳文学会東京研究例会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------